

---

**真剣で私に恋しなさい！SSコラボレーション企画『真剣で異世界を救いなさい！？』**

キョン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！SSコラボレーション企画『真剣で異世界を救いなさい！?』

### 【Nコード】

N80240

### 【作者名】

キヨン

### 【あらすじ】

パラレルワールド  
平行世界と言われると貴方は何を思いますか？

『あり得ない』

そう思いますよね。

でもそれは存在してしまうのです。……必然的に、ね。

寂れた惑星。悪魔に支配された惑星は人間のほぼ全滅を意味していた。悪魔の人間狩りから逃げ延びた人々は、隠れ、祈り続けた。

『……神よ……我らに、救いの手を……！』

儂き希望が呼び起こす奇跡と世界の軌跡が交差する時、新たなる物語が紡ぎだされる！

駄作コラボに参加いただいた作者の皆様。本当にありがとうございます！

精一杯頑張っています故宜しくお願いします！

そして、この作品を見ていただける読者の皆様。どうか最後までお付き合い宜しくお願いします。

## プロローグ く招かれし戦士達く（前書き）

ついに始めました！

この作品を最優先に書いていこうと思います。

短かったり日が開いたりとかご迷惑をおかけするかもしれませんが、  
宜しく願います。

## プロローグ く招かれし戦士達

寂れた惑星。

栄えていた文明は滅び、あるモノがこの世を支配しようとしていた。

『イビルキング  
邪王』

彼のモノはそう呼ばれた。人間は狩られ、悪魔が世を支配して行く。

そんな中、生き残った人間は身を固め闘争を続ける。しかし、そんな彼等にも限界が近付きつつあった。

残る人々は50人弱。皆精根尽き果て、満身創痍。後は滅びを待つだけなのか……。絶望の淵に立たされた人間達。

それでも、祈り続けた。

「……神よ……我らに、救いの手を……！」

この思いは、届くのだろうか……。

「……暇だ。それ以外に言葉がでねえ……」

うだうだ文句を言いながら多馬川の河原を歩く人物がいた。名を渡辺 豪。今日も今日とて暇だった。彼のすぐ横には多馬川が穏やかに流れている。そう。あくまで今だけは穏やかにだ。

「……嫌な予感が……」  
非常に危険な胸騒ぎがする豪は多馬川の上流の方を見上げた。そこから……、

洪水が迫っていた。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおツツ！！！！？  
??？」

豪は必死に走る。平和なる明日へと！

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！ あれは溺れ死ぬのが決定事項だあッ！！」

必死に足を前に出すが、水の方があからさまに速かった。後数mで飲み込まれてしまう。豪は気になって後ろを振り返り状況を確認しようとする。まず目に入ったのは水。それを率いるかのように豪より一回り大きい光が地を這うように追いかけてきていた。

「光……？ ってしまったあああああああああああ  
ッ！！！！！！」

つい足を止めてしまった豪。大量の水が覆いかぶさるよう迫る。異様にゆっくりに見えた。着水まであと1m。その僅かな時間にある光が横合いから豪に向かってくる。

「なんだあッ！？」と口が動こうとしたが、それを待たずして豪は光に飲み込まれて消えた。

さっきまで光を追っていた荒れ狂う洪水も、いつの間にか何事もなかったように収まっていた。

肩甲骨までの長さの黒髪にローズブラウンの瞳で中性的な顔立ちの青年。東雲神無という青年だ。幻の格闘技『銃闘技』ガン・シユート・アーツの使い手で、今はアルバイトの帰り。今日もしつかりと働いた神無は満足感に溢れた顔で帰り道を歩いていた。それもそうだろう。今日は待ちに待った給料日なのだから。

「さうて。お茶でも買って帰ろうかな」

神無は少し路地裏に入る自動販売機に向かう。お茶にも種類は多数存在する。生茶や緑茶、麦茶。コールドであったりホットであったり。神無は冷たい麦茶のペットボトル350mlのボタンを押す。ガコン、とお決まりの音をたて麦茶が取り出し口に落とされた。

「……ぶはあ。うん、うまい」

神無は蓋を開け麦茶を煽る。麦茶で喉が潤うのがわかる。

「……」

不意に神無はガンマンのように構える。突如、異様な気配が辺りを包んだからだ。視線を巡らせると、神無の目の前に淡い光が集まりだしていた。ぶあつ、と光に重力が傾き始め神無が体勢崩す。ふと、どこからか声が聞こえてきた。助けて、助けて、と。神無は光の奥を見る。

「助けてだつて？ わかっている、すぐ行くさ」

神無は意を決して光にダイブする。光は神無を飲み込んだ後、細かい粒となり消えた。

四季流という流派はご存知だろうか？ 武具流派最強と謳われている。その四季流十代目当主四季流星。蒼い長髪をうなじの辺りで纏め、その瞳は彼のシンボルカラーともいえる蒼だ。今はイメージトレーニング中。敵をイメージし、それを木刀で斬って行く。

「……ふう。今日はここまでだな。さ、一風呂浴びてこようかな！？」

木刀を肩に担ぎ、歩きだそうとしたその時だ。流星は普通では有り得ない光景を目の当たりにした。石が、草が、枝が、水が。全てが浮遊し、空へと登って行くのを。

「なんだ……こりゃあ……」

流星は警戒しながら上空を見上げた。今の時間帯は日がとつくと沈んだ時間。満天の星空が眺められるところだが、今はそれどころではない。その夜空に流星は見た。まばゆい光を放つ何かがこちらへと向かって来ているのだ。

「怪しいな……蒼刃嵐撃刃！」

謎の物体に蒼い気刃を放つ。が、光の塊はそれをものともせずまると飲み込んだ。光は速度を格段に上げ、流星に突っ込む。

「危ね！」

流星は爆縮地で光を紙一重で避ける。『気』の攻撃が効かないとなれば、

「直接叩き込んでやらあ！ 流閃！」

木刀を逆手に構え、爆縮地で一気に距離を詰めて木刀を光に当てる。しかし、流星が僅かに光に触れた瞬間、光に包まれて流星は消

えた。微かに『助けて』と聞こえた気がした。

「……………眠っ」

多馬川の川原に寝転んだ白髪金眼の青年が愚痴るように呟いた。  
今日は土曜日。晴天。持って来いのお昼寝日和だ。

「やっぱ、寝るに限る……………」

「ごろん、と寝返りをうつ。その時、視界の端に何かを捉えた。金色に輝く目が細まる。」

彼の名は神楽春樹。超美形で、稀に女性に間違えられたりするという良いような悪いようなよくわからないスキルを持っている。まあ生まれつきそうなのだから仕方ない。

さて、春樹が視界の端に捉えたもの。それは、  
「……………光、か？」

上空に光り輝く塊を見つけた。何やら不思議な力を放っており、周りのものが全てあれに引き付けられている。

「むッ!？」

突如、春樹の身体が浮き上がり徐々に光の方へと吸い寄せられて行く。なんとか逃れようと手を伸ばすがそれは虚しく宙をさまよう。最終的に春樹は光と共に消えた。

「……………つたく。何か暇潰しになるようなことは無いのか。おい  
ヴィヴィ、暇潰しになるもん持って来い」  
「暇潰し、ですか……………」

忌々しそうに呟く青年は大神宗介。修行など軟弱。その身に宿る  
天賦の才能のみで闘う真正銘の天才だ。只今油を格安半額セール  
にて販売中。つまりはめっちゃくっちゃ暇であるということ。

そして、その彼の斜め後ろに控えるのがヴィヴィアン・バゼール。  
宗介のメイドさんである。元々は黒い組織　スミマセンスミ  
マセン！　その毒を塗った針は飛ばさないで下さい！

……………まあ、宗介の我が儘に振り回されている人と解釈しても  
らえれば良い。

「少々お待ちを……………」  
「そう言い、ヴィヴィアンは闇に消えた。

「……………ああゝあ。暇だなオイ」  
宗介は暇で暇で仕方ない。百代の『気』も今は無いし、強者も現  
れない。いい加減ストレスというものが限界にきていた。

宗介が歩く先に小石が一つ転がっている。無意識的に蹴ろうと宗  
介が足を僅かに振り上げる。　刹那、蹴ろうとした小石がい  
きなり前方に跳んだ。勿論、宗介は触ってもいない。では一体誰が  
？　宗介は本能が騒ぐ身体を抑えつけながら前を見た。

そこにあつたのは光。何の変哲も無いただの光の塊だった。しか  
し、いくら変哲が無いといってもここに光が固まっているのはおか  
しい。

宗介は、歡喜の笑い声を上げた。

「いいねいいねえ！ 俺を楽しませてくれるようだなあ！」  
その目は狩人のそれと化していた。宗介は未知なる敵に期待を込め、光に躊躇無く飛び込んだ。

「……………」

ここは生徒会室。今は金髪にルビーのような赤い瞳の青年がパソコンに向かって何かを見ていた。

霧夜王貴。現生徒会執行部の生徒会長を務める。何故生徒会長なのか？ 簡単に言えば無理矢理だ。王貴の性格を理解していれば充分に察知出来る筈。

朝早く王貴が学園に登校。

生徒会室へ直行。

「この王<sup>オレ</sup>自ら生徒会長とやらになってやるっ」

「この王<sup>オレ</sup>に従うがいい。生徒会役員共めが！」

王貴、生徒会長になる。

みたいな感じだ。

どんな内容をしているか、とか経緯は？ なんてのは置いておこう。話がズレてしまう。

さて、現在生徒会室には王貴一人のみ。暇な彼はパソコンのI Tubeにて閃閣諸島沖問題で有名となった流出動画を見ていた。日本の巡視船『みずほ』に中国船がぶつかるとかやつだ。

「……くだらん」

王貴は動画に哀れみの視線を送る。動画がくだらない、のではなく、さつさと解決しない日本や中国の政府がくだらないのだ。

フン、と鼻を鳴らしウィンドウを閉じる。シャットダウンはせずにそのまま王貴は踏ん返り返るようにソファーに体を預けた。不意にブズン、と耳障りな音が王貴の耳に響く。

「む？」

体を起こし、音がしたであろうパソコンのディスプレイを見る。

その画面は真っ黒に染まっていた。

「……壊れたか？ これだから安物は……ん？」

真っ黒な画面をよく観察する。見れば、白い縦棒がチカチカ点滅を繰り返していた。そこに、文字が打たれる。勿論、王貴は触つてもいないのだ。

『Parallelworld:助けて。』

たったそれだけ。パソコンはそれを映した後、動作を停止した。しかし、王貴は動かない。

「……なんだ、一体……」

ポツリと王貴が呟く。刹那、王貴を中心に光が集まり、霧夜王貴という存在を転送させた。その後、光も霧散し元の静かな生徒会室に戻った。

「王貴ー！ いるか……ってあれ？ 確かにここにいると思ったん

「ただどなあ……………」

バン、と扉を開け放ったのは赤いバンダナがシンボルマークであるキャップこと風間翔一であった。

「ま、いつか」

王貴を諦めた翔一は風のように生徒会室を去った。王貴が消えたとは知らずに……………。

「あ……………。空中散歩つても楽しいもんだ」

川神市の遙か上空。白銀の長髪を逆立て、首に銀色に輝く5mはあろうスカーフを巻いた金眼の青年が優雅に翔んでいた。彼の名は天音椎狩。四天王川神百代と肩を並べる猛者だ。『気』と足技を使う彼の闘いは見る者を魅了する。

そんな椎狩の休日。彼は『ネイチャーシエイク自然体』と化し、晴天の空の散歩中だ。いつもなら百代や風間ファミリーの人達を誘ったりもしているところだが、今日は一人。久しぶりの静かな時間を椎狩は心行くまで堪能していた。

「ああー。雲の上で寝てみたいーい。ドラ も〜ん」

なーんて冗談を言っていると、急に轟！ と突風が吹き荒れた。

「どわっ！……………とお…何だあ？」

いきなりの出来事に体勢を立て直した後風上の方を見た。しかし、そこからは何も怪しいものはなかった。

「むっ！？」

咄嗟に椎狩は風下の方を見た。そちらから、今まで感じたことのない『気』とは断言出来ない何かを感じたのだ。

そこにあつたのは、光の入口。<sup>ゲート</sup>そこに向かつて空気や雲が吸い寄せられて行く。突風が吹いたのもそのせいだ。

ふと、光から無数の声が。『助けて！』『救いの手を！』等、どれも悲痛なものばかりだ。

椎狩は不敵に笑う。何故か？ そんなこと、決まっている。

「助けて、なんてほっとけないねえ。悪魔でよけりゃ、救ってやらあ」

椎狩は遙か下に見える川神市を一瞥した後、光の塊へと飛び込んだ。刹那、光が霧散する。そこには、椎狩の姿などどこにもなかった。

『導かれし七人の戦士よ。悪を討ち、世に平和をもたらせ！』

彼らは擦れたその言葉を最後に耳にした。

ブローグ 招かれし戦士達 (後書き)

どうでしたか？

キャラがちゃんと書けているか、ものすごく心配です。  
これでよろしいでしょうか？

## 空と大地と民家の中で

どこまでも果てしなく続く鉛色の空。その雰囲気に参道するように冷えた風が吹く。

その上空に一つの光の塊が現れた。光は弾け、中から一人の青年が出てきた。

白髪の長髪を逆立てた金眼に銀色の長いスカーフを首に巻く青年。名を天音椎狩。

「結局、光に飛び込んだはいいが……どうすりゃいい……」  
彼は助けを求める声を聞き、ここに来たワケだが完全に無計画であつた。

椎狩はあまりよしとは言えない風景を見渡す。眼下には、元々は小さな村であつたようなボロボロの木造建築の住宅がいくつあつた。その全てが壊れ果て、蔦に絡まれその家としての機能を完全に失っていた。

「……………こりゃ酷い」  
目が細まる。一体誰がこんな惨いことを……。あからさまに誰かしらの手により破壊され尽くした村。畑や田もスタスタに荒らされた形跡があるのがよくわかつた。

また、気味の悪い風が吹く。

寒さに身震いした椎狩は拳大の炎を手の平に出現させる。彼がやっているのは、『自気』を炎に変換させること。『自気』をマスタ―した椎狩ならではの特殊なものだ。他にも、『雷』『水』『氷』『樹木』『大地』『風』の力を作り出すことも出来る。

そして今、彼が『自然体』<sup>ネイチャーシェイプ</sup>となっているのは『自気』を取り込んで起こる変身した姿だからだ。こうなれば、椎狩は大自然のありとあらゆるモノを支配することが可能となる。

拳大の炎は小さな塊に分かれて椎狩の回りを飛び交う。炎からは暖かい光が輝いた。

ギョウアアアアアアツツ！！

パンツ、と炎が飛び散る。椎狩は咄嗟に上を向いた。

そこには、鳥のような顎に細やかな牙。黒い翼に紅い羽毛。紅毛に包まれた先端が黒の尾。体長15mは下らない巨大な生き物が椎狩に向かってダイブして来ていた。直ぐ様体を移動させ、怪鳥の突進を回避する。物凄いスピードで突っ込んだ怪鳥は直ぐに急停止。進路を変えてまた突っ込んでくる。ダイブの時よりスピードは墜ちるがそれでも速い。紙一重で避けた後、一発叩き込もうと接近しようとするが、

「ぐうツ……………」

怪鳥がすれ違った際の暴風により上手い具合に動けなかった。

(……………近付けねえなら、)

「近付かねえで攻撃するまでだ！」

椎狩の両腕が漆黒の『気』に包まれる。その『気』の正体は椎狩自身の『気』でもなく、『自気』でもない。漆黒のおぞましいソレは『邪気』と呼ばれる。相手の精神状態をまるごと狂わせる程の恐怖を生み出すのだ。椎狩は漆黒に包まれる両腕を前に突き出す。すると、そこに漆黒の球体が浮かび上がる。

「《天音流》邪砲」

椎狩が呟くと、漆黒の球体は柱と変わり果て怪鳥へと迫る。漆黒の柱は怪鳥に当たり、怪鳥は漆黒の柱が触れたところのみを削りとられていた。柱は最終的に怪鳥全部を飲み込んでしまう。

「ざつとこんなモンか」

椎狩の攻撃は怪鳥を欠片も残さずに消し去った。怪鳥を消し去った柱の攻撃は地面も深々と削りとっており、椎狩はそれを見て冷や汗を流す。

「……………誰も巻き込んでないよな……………」

「ええいッ、チクシヨウ！ 結局は水を被るハメになるのかよ！」  
バシャバシャと川から這い出て来た者は地団駄を踏む。転送されていきなり川の中にいたのだ。そりゃあ悔しいし嫌だろう。

「ハツツクシヨオンツ！！！」

渡辺豪は豪快に一つ嚏くしゃみをする。刹那、黒い柱が上空から豪のすぐ横を撃ち抜いた。

.....  
そのままの体勢で固まる。あまりにも突然ですんごい迫力だ。平常心を保つてると言うほうが無理なのだ。

「おおおおおおお！！？」

急に豪に覆い被さるように何かが落ちてきた。それは豪の頭にゴツ！ と鈍い音をたててぶつかる。

「ぬおおおおおッ！！？」

落ちてきた銀髪の青年と豪は互いにぶつけた頭を抑えのたうち回る。

「誰だ！」

「お前こそ！」

二人はすぐに立ち上がり対峙する。豪は落ちてきた銀髪の青年を見た。白髪に金眼の眼。美形で女性にも見える顔立ちは、とても綺麗だった。

「強襲か！ なら楽しもうぜエッ！！！」

「ま、待て！ 話を聞け、獣！」

真っ直ぐ突っ込んでくる豪を横っ飛びで紙一重で躲し向き直った。

「俺はここにいきなり翔ばされただけであり、貴様を攻撃するなど一つもないのだ！」

「いきなり、だと……」

青年の言葉に豪は動きを止める。因みに拳は青年の顔スレスレで止まっていた。

「……いきなり、つてことは…光かなんかがなかったか？」

豪は威嚇するように青年を睨む。

「……まあ、それに吸い込まれたのだが……貴様、名は？」

「あん？ 俺は渡辺豪。お前は？」

「俺は神楽春樹」

どこかホツとした表情で答える春樹。彼は今までまともに修行すらしたことがなく、真っ正面からいきなり滅茶苦茶強い者だと少々分が悪いのだ。

「ま、いいか。同志ならそれでいいとして……取り敢えずどっか行こうぜ」

スタスタと歩き始める豪。春樹は駆け足で行って行った。

「どうも、天音椎狩です」

「……………」  
固まった。

暫く獣道をのんびり歩いていた豪と春樹。その途中で妙な人物に

出会った。空中に浮き、白銀の髪を逆立て金眼を輝かせる青年だ。首には5m近い長さのスカーフが巻かれている。

「あー……椎狩とやら」

見兼ねた豪が椎狩を指差しながら疑問をぶつける。

「アンタ、何者……？」

人が浮いているなら疑問を持つのは当然と言えるだろう。まあ質問の内容も内容ではあるが……。

「めっちゃ人間だけどなにか？」

凄い笑顔で答えられた。あはは、と二人は苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

「……いきなりこんなところにいるとは……王オレに無礼とは思わんのか？」

これまた違う場所。古びた民家の家の椅子に霧夜王貴は座っていた。

「王オレにはどんな持て成しがくるのか……クツクツ、楽しみだ」  
小さな笑い声が薄暗い闇に溶けていった。



空と大地と民家の中で（後書き）

今回は

闇に咲く花たちより渡辺豪。

真剣で私に恋しなさい！〜白髪の放浪者〜より神楽春樹。

真剣で王に恋しなさい！より霧夜王貴。  
が登場しました。

youkey様、薫様、兵隊様、これでよかったですか？

P・S

次回は王貴中心……かな？

10 / 12 / 19 加筆

## 王と銃（前書き）

短いですが、なんとか出来たのでどうぞ。

## 王と銃

「クッククク…まさか、この程度ではあるまい……？」

皮肉気に笑う王貴。目の前には黒い布切れのような物がいくつも落ちていた。風に靡くそれは不気味な『氣』を放出していた。

こうなる数分前。王貴は民家を出てすぐ、黒い二足歩行で羽を持つ爪で攻撃するモノに襲撃されていた。と言っても王貴にとっては雑魚中の雑魚。余裕で撃破していた。

不意に、黒い塊が動きだし一つになって行く。幾度となく繰り返される破壊と再生。そんなサイクルに王貴は薄々飽きてきていた。

「フン。まだ足掻くか。ならば、消し炭すら残さず消してやる。王に感謝するがいい」

王貴の背後に金色の柄が現れる。王貴はそれを引き抜く。それは円剣。名を螺旋剣<sup>エンリル</sup>。王貴の最強の剣。五行の力により造られたそれは、互いの属性が反発し合い『無』を創り出す。

「絶望に沈め。エレ・シユキガル！」

螺旋剣<sup>エンリル</sup>を構え、振るう。紅い閃光が地を削り、黒い塊を丸ごと飲み込んだ。暫く砂埃が立ちこめる。

砂埃が収まるとそこは悲惨な光景だった。抉られた地面。崩れた物。死んだ空気。全てが『無』になった。

「屑が。王を楽しませることも出来んか」

王貴は不機嫌そうに吐き捨てた後、背を向け反対側へと歩き出す。意外にもあっさりと終わった襲撃戦は悲惨な結果を残し、王貴の圧勝で幕を降ろした。

「……痛った…どこだここ？」

額を抑えながら一人の中性的な顔の青年が民家であったたろう家の裏から出てきた。東雲神無。それが青年の名である。銃格闘技『ガン・シユート・アーツ』の使い手だ。

あの謎の光に飛び込んだと思ったら、いきなり額を壁にぶつけたのだ。予期せぬ事態に出会しちよつと困っていた。

神無は不気味な鉛色の空を見た。地球では見る筈の出来ないような生物が多数飛んでいるのがよく見える。

「……少なくとも俺がいた地球じゃないのは確かだ…なら、転成か…いや、普通はあり得ない…けど俺らが普通じゃないのか…？」

神無はついさっきまで自分がいた川神を思い浮かべる。軽く傷ついた自分がそこにいた。

「……そっか…俺らが異常なんだな」

トホホ、と肩を落とす。

よく考えれば平和主義の日本で強くなるうとあまり意味は無いのかもしれない。戦いは、争いなのだから。強くなったところで、その使い道を誤れば自らを滅ぼしたり戦争の火種にも成りかねない。そんな日本で強くなる自分。異常なのか？ それは川神市だけなのか？

「ま、考えても無駄っ、てかつ？」

神無は思考を中断。それより、と前置きをしてから、

「まずは、困ってるやつを助けないとだな。考えるなんて、それからでも出来るんだし」

ニツ、と口角を上げて路地を駆けた。





走る速度は同じ。体力面からすれば、何れ神無が追いつかれるシチュエーションになるだろう。

「ッ!？」

神無の体勢が僅かに揺らぐ。後ろにばかり気を取られて前を意識しておらず、小さな石に躓いたのだ。

「くっ!」

速度が一気に減速。黒いモノに捕まりそうになった神無はインビジブルドローで何とか逃れようとする。が、無理な体勢からの攻撃により、僅かな隙をついて黒いモノが懐に潜り込もうとしていた。

反応は出来たが、反射が出来ない。神無は衝撃に耐えようと全身に力を込めた。

## 流れ星

四季流星は木刀を肩に担ぎ目の前のモノと対峙する。

数分前。流閃をしながら光に飛び込んでしまった彼は、そのまま目の前にいた黒いモノを撃破してしまっていた。そこからが大変。

一気に黒いモノが周りに集り始め、今や五十体近くに囲まれていた。「チイツ！ 数が多い上に無限再生かよチクショウツ……！」

爆縮地で細々と場所を変えながら何回放ったかもわからない程使った蒼刃嵐激刃を放つ。先の十体は切り崩しても、まるで洪水のように後から後から敵が溢れ出てくる。流星は振り向かず後ろに蹴りを入れた。それにより、接近していたモノが二体を巻き込みながら吹き飛ばす。

それでも、まだ数は減らない。

「星斬りも使えねえし……！」

流星の使う星斬りも、僅かに数秒間無防備な姿を曝け出す必要が出てくる。一秒も経たぬ間に次々と突っ込まれば、『気』を溜める時間をとることすら出来ないのだ。

「蒼刃雷撃刃！」

木刀を横に振るい、蒼い気刃を放つ。気刃は流星の眼前を斬り裂き、一本の片道を作り出した。

流星は一気に駆け出し、何十メートルも距離を開ける。そこで一旦止まり、後ろから追ってくるモノを睨んだ。

「行くぞ…星斬り！」

斬！！！！！！

木刀に大量の『気』を流し込み、水平に斬る。蒼い巨大な気刃は地を削り、迫りくる黒を飲み込んだ。

「ふう……いきなりしんどすぎる……」

黒いモノを完全に消滅させた流星。今は額の汗を拭い地面に経たり込んでいる。

なんとか消すことは出来たが、流石に数が多かった。星斬りも一回使用したし、他にも爆縮地や蒼刃嵐撃刃などで『気』も消費。動き回ったせいもあり、体力も大分減らされていた。

「ああ……、一旦どっか安全なところに行こう。そっちの方が安心して休めるし……」

木刀を支えに立ち上がり辺りを見回す。視界に入るのは壊れた民家と荒れた土地。亀裂が入り、コンクリートの剥がれた道路、そして寂れたバイクや車。

どこをどう見ても人がいるような環境ではない。取り敢えず、と流星は近くの民家に足を踏み入れた。

民家の中は少し綺麗であった。まるで、数ヶ月前まで人がいたような。そんな錯覚がするような……、

「いや、違う……実際に住んでたんだ」

よくよく見れば少しおかしい。台所のテーブルの上には食器が綺麗に並べられ、あたかも今は腐った料理が置かれていた。普通なら蠅<sup>ハエ</sup>辺りが集る筈だが、その蠅すらいない。この星の生命体は一体どうなっているのだろうか？ 流星は疑問に思いながら別の部屋へと移った。

次は居間。畳部屋の中央には卓袱台があり、周りには二つの座布団。ふと、仲良くお茶を啜る老夫婦の姿が見えたような錯覚に流星は陥る。いつもののんびりとした日常。それが、突然消失したような。そんな感覚だった。

「許せねえ……!!」

音もなく、拳を握る。平和な日常を躊躇いもなく潰し命を奪う。そんな輩のことを流星は許しておけなかった。命を軽々しく扱う者は、流星は大嫌いなのだ。

「ッ!!」

また、あの黒いモノの『気』が感じられた。

「野郎!」

流星は民家を飛び出して走る。世を壊すモノは、俺が斬る。そう心に誓い『気』の元へと走った。

黒いモノは、流星が対峙したのと同じくらい多くおり、青年を囲んでいたのを見た。青年の拳は、まるで弾丸の如く次々と黒いモノを撃ち抜いていく。

「やるな……」

遠巻きにその光景を見ながら流星は呟いた。距離はまだあるが、流星の視力と『気』を感知することにより、曖昧ではあるが様子が

わかった。

青年が、包囲網を突破してこちらに向かい駆けてくる。

「危ねえッ!」

青年の行く先には石。余所見をしていた青年はそれに躓き、しまず体勢を崩す。そのせいで、黒いモノが一気に接近する。

「させるかあッ!」

足を更に速め、流星は青年との間に入り込み、

「九牙穿!」

神速の突きを九発当てる。それだけで黒いモノは吹き飛び、消滅した。

「蒼刃嵐撃刃、蒼刃雷撃刃!」

立て続けに二回木刀を振り、蒼い気刃を大量に翔ばし巨大な気刃で一掃。三十体近くが消えた。

「アンタは」

「流星、四季流星だ!」

青年が言葉を紡ぐ前に流星は言う。

「流星か。俺は東雲神無! 危ないところをすまなかった」

「神無だな。説明は後。まずはコイツらを斬る!」

肩に担いだ木刀が、一層蒼く輝きだす。

「助力する!」

神無も再びガンマンのように構え、対峙した。

流星は大声で告げる。

「覚悟しろ! 平和を乱す者は、唯一人の使者として

、お前らのふざけた思いを叩っ斬る!……!……!……!」



## 悪魔の誘い

少し背の高い木々が立ち並び小さな林の中。天音椎狩は数十分前から絶えず『邪気』を広範囲にまき散らしていた。

「……なんつう殺気だ…刃物を首に押し当てられてるような…こつちが殺されそうだな」

椎狩の『邪気』を見て神楽春樹がポツリと呟く。敵ではない椎狩の『邪気』であつてもつい身構えてしまう。それぐらいの迫力…いや、恐怖が本能を揺す振ってしまう程、椎狩の『邪気』はヤバかった。同じく隣にいる渡辺豪も冷や汗をだらだらと掻いていた。

「……こちらに向かつてくる人は四人。内二人は共闘中、か」

椎狩は林の隙間から見える鉛色の空を、目を細めて見た。何かを掴んだような、そんな目だった。

時間は数十分前に遡る。さかのぼ

「……アンタは本当に人間らしいな……」  
目の前の『自然体』ネイチャーシエインを解いた状態の椎狩に豪は顔を引き吊らせながら口を開いた。

「正真正銘、人間だ。……普通じゃない、な」

最後にポツリと小さく、消え入りそうな声で呟くのを春樹は聞き逃さなかった。

「普通じゃない、ってのはどういうことだ？」

春樹の疑問に答えるように椎狩は薄く笑った後、ゆっくり瞳を閉じてから開いた。

「こういうこと」

「ブアッ、と椎狩が黒い『気』に包まれた。

「ッッッ!?!?」

豪と春樹はすぐさま退き身構える。感じ取った『気』は完全なる悪。敵かと思える程のその『気』を支配する椎狩。一言で表せば、正に『悪魔』だ。

「そう堅くなることはない。別に捕って喰ったりなんかしねえよ」「カラカラと暢気な笑い声を上げながらその黒い『気』を収める。すると、さっきまでであった緊張の場の空気も霧散した。

「この『気』は非常に危険だな。俺は『邪気』と名付けている」「二人に説明するように椎狩は言葉を紡ぐ「人の『気』を支配する為に与えられた『邪気』。唯一俺が持つ特殊な『気』だ」

次に、と今度は手を上に向けて開いて少し前に出した。すると、そこに拳大の炎の塊が精製された。

「俺の『邪気』と『気』を組み合わせるにより支配出来るのが自然の『気』である『自気』」

手の上で躍っていた炎が次は雷、氷の塊と姿を変えていく。当の椎狩本人も髪が時折白銀になったり、眼が金色に変化したりなど、『自然体』の変化が二人からは見受けられた。

「……『悪魔』、ねえ……こりゃ大したモンだ……」

椎狩を見て豪は笑う。その挑戦的な笑みは最早『獣』。誰にも止められない。

「取り敢えず、挑戦はまた今度な。今は現状の理解・解決が最優先だ」

「ちょっと離れてろ、と言って再び『邪気』を放つ。さっきよりも、

数段量や質が上がっているのがわかる。

「人を集める。俺達の他に、後四人の『気』を感知した。『邪気』<sup>コレ</sup>を使って誘う」

『邪気』は、どんと上空に向かって黒い柱を作り出す。そこからも常に『邪気』が放たれており、広範囲にあの殺気が振りまかれた。

「……引っ掛かってくれよ……」

こうして、今に至る訳だ。

「……疲れた」

突然、椎狩の『邪気』が霧散した。椎狩本人も地面に座り、大きく息を吐くのだった。

「おいおい、大丈夫かよ……」

心配になった春樹が歩み寄る。

「大丈夫大丈夫。ただ単にずっと待ち続けるのが疲れただけだしハア、とまた一つ溜息をつく。」

「……さて。そろそろかな」

十分程の休憩を終え、椎狩は立ち上がった。

「そろそろって……！？」

何が？ と口を開きかけた豪だが、不意に感じられた『気』に身震いした。春樹も同様で周りを警戒している。

「いらっしやい。一名様ご案内だ」

椎狩の視線の先。そこにいたのは堂々たる王。金髪赤眼の青年であつた。

「貴様が、あの『気』の正体だな？」

王を愉しませろ」

霧夜王貴。彼の背に劍群が現れる。

「春樹、豪。離れてろ。どうやらお遇しもてなが必要らしい」

突風が椎狩を中心に吹き荒れ、鉛の空には稲妻が迸る。大地は揺れ、木々がけたたましく唸る。

「全てを支配せし悪魔の遇し。是非に受け取れ」

ドンツ！ と小爆発が起きた。その中心から現れた椎狩は、金眼にて王貴を睨む。その顔は不敵な笑みを浮かべていた。

「よかろう。王に逆らう権利……いや、義務を与える。存分に傷めつけてやるう」

背後の剣は更に数を増やす。

史上最悪の決闘が幕を開けた瞬間だつた。

真の天才とある少女（前書き）

宗介のターン！

## 真の天才とある少女

異境の地に降り立った大神宗介はキョロキョロと視線を辺りに巡らせる。

「なんだ、いわゆるテンプレつつうやつか？」

かなり冷静な表情の宗介。それでも、目は光っている。

「……取り敢えず歩くか」

立ち止まっても仕方無いので情報を求めて歩く。

視界に入るのは、人工的に荒らされた農村の一部。人気も無く、ここは元々村であったのだろうと宗介は解釈した。しかし、一体誰がこんなことを……？ そればかりが頭の中をグルグルと回り続ける。

考えても駄目だなと判断した宗介は思考を中止。近くの古びた民家へと入った。

玄関では靴を脱がずに土足のまま上がり、廊下を突き当たりまで進む。扉が開け放たれていた部屋は居間。低い長方形のテーブルと長座布団が数枚置かれていた。以外にも薄型のテレビが置かれていたりもする。地デジだったとすれば、この世界の進歩は地球とほとんど変わらないのだろう。そんなことを思いながら、宗介は細々とした場所まで調べる。

例えば、隠し部屋みたいな扉は無いのかな、とテーブルの下の畳を剥いてみたり、テレビの裏に回ってみたり、ボタンを探してみたりと色々と探した。

少し子供っぽいことばかりしているのにはちゃんとした理由がある。それは、民家の保存状態にあった。数週間から数日前までに掛けて明らかに誰かが住んでいた形跡がそこら中にあるのだ。例に上げるとすれば、洗濯物。普通は畳んで隅に置くか片付ける辺りのことをするのだろう。が、この家の場合、洗濯物は畳んでいる途中で止まっており、所々後から踏まれている形跡があった。

そして、さつきから目に付くのが、『全てが人工的に荒らされている』ということだ。誰かに襲われたと考えるのが良いだろう。十数人単位ではなく、恐らくは三百人程度の集団にだ。

平和主義の日本では、護身術すら覚えのないのが普通と化してきている。そんな時に襲われればひとまりもないだろう。

宗介は固くなった座布団に座り込む。まずここはどこなのか。そして何故自分がここに来たのか。後は食料や寝床の確保といったことを考える。といっても考えが全く浮かばない。

ここまで寂れた村では、寝床はともかく食料などは無いに等しいとなれば移動して行くのが望ましい。ここがどこなのか等よりは、まず身を守る方を優先的に考えることにした。

カタン、

「ッ、誰だ！」

静寂の部屋に物音が響く。宗介はすぐ様反応し、音のした方へと賭けた。

「……アア？」

そこにいた者。それは幼い少女であった。

「ああ……ひ、う……」

いきなり宗介が現れたことにより、少女は尻餅を付き涙目で宗介を見上げていた。

「!？」

咄嗟に宗介は少女を掴んで走り出した。刹那、さつきまで二人がいたところ一帯に黒い球が直撃。そこだけが、完全に抉り取られた。「なんだッ!？」

宗介は一旦外に出て周囲を確認する。すると、上空に黒い球体が浮かんでいた。放たれる『気』は完全なる悪。宗介でも、今までで一度も感じることもなかったモノだ。

その『気』の球体から、沢山の一回り小さい『気』の球が生まれる。

「……やりてえのは山々だが…荷物もあるしな……」



波が辺り一帯を撒き散らす。衝撃波は黒いモノ共全てを吹き飛ばした。もうそれ以上、黒い球やモノが現れることはなかった。

一方、別の場所では……。

「！！？」

四季流星と東雲神無は目の前の光景を見て目を見開いた。今まで対峙していた黒いモノ達が霧散し、消滅したのだ。

「……なんだ、一体……？」

「……さあ……？」

それより、と二人は別の方向を同時に見る。

大自然を圧縮したような『気』と、もう一つの『気』が少し遠くの森で激突しているのが感じられた。

「俺らも行くぞ」

流星に促され、神無はああと頷き二人は走り出した。

「案外、呆気無えな」

その惨状を見て、宗介は呟く。

荒れていた土地は、空爆でもあった跡のようなものが出来上がっていた。正に核爆弾が落とされたような。そんな状態だった。

「……………」

宗介にびつたり少女はポカンと口を開けて惚けていた。あれだけのことを目の前でやられればそれは誰だっところなる。一部例外もいるっちゃいるが…………。

「……………それで、お前は誰だ？」

今更ながら宗介は名前を訊く。あんな戦闘中に声を掛け合う暇などある訳がない。

「えっ……………」

驚いて固まる少女。

今更だが、少女をよく見てみよう。丸みを帯びた感じの金髪青眼そはかすに雀斑、13、4歳の容姿。純白のワンピースに下に黒のガーターを着ている。

「えう……………メアリー・フィティナス……………」

外人か？ と宗介は首を捻る。さっきの民家には畳という思いっきり和風な筈なのにと宗介は思い出した。

「……………なんで外人なんだ？ ここは思いっきり和風なトコじゃねえか？」

「へっ……………あの、えっと……………逃げて、来たから……………私もよくは……………」

歯切れの悪いメアリーの言葉に舌打ちする。

「ああそうかい」

苛立ち全開で言葉を返す。

「……………取り敢えず訊くが、逃げて来たってのはどういうことだ？」  
大方予想はつくが、恐らくあの黒いのに追われていたのだろう。

「……………邪王の『人間狩り』イビルキングから逃げて……………それでここに着いたの……………」

「『人間狩り』、だと……？」

宗介は不吉な言葉に目を細める。

『人間狩り』とは文字通り人間を狩り、殲滅させることに意味があるらしい。メアリーはそれを逃れてこの地まで足を運んだらしいのだが、それでも追い付かれ必死に逃げていたところ、宗介に出会ったらしい。そして、『邪王』<sup>イビルキング</sup>とは。主に、この星の支配を目論む張本人らしい。実際の姿を見たことがある者はおらず、恐ろしい力を使ってくるとのこと。あのような攻撃は序の口。もっともっと強い何かがある。そうメアリーは語った。

「はあ……んでまたそんな世界に飛ばされにやいかねえんだ？」

メアリーが一通り喋り終わった後、宗介は愚痴るように呟いた。それにメアリーが勢いよく飛びつく。

「飛ばされたって、一体どういうことですか！！？」

「だああっ！ 五月蠅い！ いきなり耳元に飛んで大声出すな！」

メアリーは宗介の右腕に捕まって耳のすぐ横で喋り、宗介はそんなメアリーから顔を遠ざけようとはするがこれがなかなか離れない。流石に助けを求めているような表情の少女は放っておける訳がなく、無理に投げる訳にもいかない。

「飛ばされたってことは、神様に願いが届いたって訳ですねッ！！ やったー！」

宗介の肩から降りてピョンピョン跳ねまわるメアリー。どんどん勝手に話が進んでいき、宗介は頭が全く追いついていなかった。

「それじゃあ、宗介様は私達を助けに来てくれたんですね！ そうですよね！」

「……助けに来た？」

助けに来たなんて覚えは全く持って無い。ただ単に面白そうだから来ただけであって、別に世界がどうだろうと宗介は構わなかった。そうか、とどうでもいいとはかりに呟いた宗介は歩きます。

「ま、待ってくださいー！」

テテテ、とメアリーが追いかけて来る。しかし、宗介は興味を

無くしたようにズンズン前へと進む。

「ど、どうしたんですか？」

哀しそうな顔で訊いてくるメアリーに宗介はポケットに手を突っ込み素っ気無く返した。

「別に俺は世界を救いに来た訳じゃない。面白そうだから光に飛び込んだ訳であり、それよりどんなことが起こるかさえ聞いてなかった。だから、俺にお前らを救う義理なんざ存在しねえ」

そう吐き捨てて歩く。

「そ、それでも来てくれたし、私を助けてくれたじゃないですか！ピタッと宗介の歩みが止まる。

『助けた』

確かに宗介はこの少女を助けた。確かにあの時、放っておけば少女はここにはいなかった筈だ。それでも、一人の命を救うため、彼は動いた。それなのに、今更『助けない』など。自分は間違ったこととは言っていない。それでも、何故かああ言った自分がおかしく見えた。

「……………そうなのかもな。……………メアリー」

名を呼ばれ、堅くなるメアリー。そんな彼女の目を見る。『助けてほしい』そう訴えていた。

自分はヒーローではない。英雄でもない。正義の味方でもない。でも、悪でもない。それなら、理由が無くとも、この少女を救っても良いのではないか。そう思った。

「……………着いて来い」

その一言。たった一言で、少女の顔に花が咲いた。メアリーは、「ハイッ！」と返事をし、宗介を追いかけて行く。

「……………これから、どうなるんだらうな……………」  
鉛色の空を見上げ呟く。

雲の隙間からは、青い空が見えたような。そんな気がした。



真の天才とある少女（後書き）

それでは次回。



通り過ぎ、森の奥へと消える。球体が通ったところは全てが削り取られていた。

「……まあ良い。今までと同じことをしていくまでだ」

再び王貴の背後に武器が浮かび上がる。数は……百以上。全てが椎狩に向けられている。

「……おかしいぞ……」

遠巻きに観戦していた神楽春樹がポツリと呟いた。

「おかしいって……何がだ？」

同じく隣にいる渡辺豪が問い掛ける。豪から見ると、特におかしいところは見受けられない。最初は椎狩の変化に動揺しかけたが、あれも技の一部と解釈した。

「……あの金髪、武器を『気』で作り出して投合するっばいんだが……刃の切っ先がブレているんだ。椎狩が黒いのに包まれてから、な……」

春樹に言われ、豪はその武器を見る。確かに微妙ではあるが、刃の切っ先が椎狩に向くのを拒むように震えていた。王貴の顔も歪み始めている。

一気に武器が椎狩に降り注ぐ。しかし、それは当たることなく地面に刺さった。

「んなッ……！？ 王は確かに狙った筈……貴様、何をした？」

驚愕の表情を浮かべた後、王貴は椎狩を睨んだ。悔しさと苛立ちが混じったその顔は、普通に恐ろしかった。

『ドウモコウモ何モシテイナイ。才前ノ実力ガソコマデトイウコトダロウ？』

王貴の問いに冷静に返した。

「貴様……この王を愚弄するか！」

ガシツ、と王貴が背後に現れた金色の柄を掴み、抜きはなつた。

「我が螺旋剣の前に平伏せ！」

王貴の手に握られた螺旋剣が回転し始める。

『……ソレガ才前ノ最強力。ナラバ、次ガ最後ダ』

椎狩の周りに黒い球体が三つ現れ、その周りを回転する。

「王の一撃、見事耐え切つてみせよ！」

螺旋剣を大降りに構えながら王貴は言う。椎狩はそれに誠心誠意の思いを込めて返す。

『デハソノ一撃、有り難クイタダコウ』

球体の回転速度が更に上がる。互いの『気』が最高潮に達した時、二人は同時に仕掛けた。

「螺旋乖離エレ・シュキカールす大嵐の風！」

『我流、参乃型 黒嵐クロアラン』

紅き閃光と漆黒の塊が激突する

!!!!!!

大きな地震と地鳴り。その規模は半径15 kmを範囲とし、幾多の場所を破壊した。

大神宗介、四季流星、東雲神無、メアリー・フィティナスは突然のことに驚き、バランスを崩す。元々身体能力の高い三人は持ち堪えたが、メアリーは宗介にしがみ付き、ことなきを得る。

この四人は先程出会ったばかり。今までの過程を知り、同じ境遇ということと共にある場所を目指していた。

その『ある場所』。それは、先程巨大な『気』が激突した所だ。

「……なんつう威力だ…あんな力の塊、普通じゃないぞ……」  
強い力の感じられた方を見て宗介は呟く。

「な、なななな何ですか、今のはッ!？」

メアリーは宗介にがつちり捕まり涙目で尋ねた。一瞬だけ羨ましいと思つた流星と神無は頭をブンブンと振り、叩いて思想を追い出す。前世でこんなことをしていれば、世界最強に星にされるのが確定してしまうのだ。何故か一瞬だけ寒気が奔つたのは冗談じゃないだろう。

「……ええい、おかしくなる前に行くぞ!!」

「おおッ!!」

冷や汗を流して進む二人。その急変振りに宗介はかなり動揺した。

「お、おお……（…一体どうした……？）」

二人の行動に首を捻りながら宗介は付いて行つた。自分がその原因だとは知らずに……。

そこは、元の姿を跡形も残すことなく荒れていた。特に、互いの技が衝突した地点には深く、大きなクレーターが出来ていた。

「……まだやるつてか？」

静かに佇む王貴を見ながら椎狩は余裕の笑みを浮かべた。

「……名は何と言う？」

王貴は椎狩に技を相殺され、暫く固まっていたが、やがてゆつくりと口を開いた。それに椎狩は友好的な笑みを浮かべて「天音椎狩だ」と返した。

「椎狩、か。大儀、誇つて良いぞ。王は霧夜王貴だ。……それと、その二人も来い。王たる王に無礼だと思わんか？」

王貴は椎狩の後ろの方に待機する豪と春樹に声を掛けた。

「丁度良い。四人で話でもしようじゃないか。今までの経緯について、とかさ」

薄く笑い、椎狩は三人を見た。取り敢えず不服ということはなさそうだ。

「さて、まずは他の三人が来るまで暇潰しといこうか」

「……何故待つ必要があるのだ？」

場を仕切ろうとする椎狩を王貴は睨む。わざわざ待つ必要など無いと本人は思うのだろう。天上天下唯我独尊の霧夜王貴なのだから。

「ああ、これにもちゃんとした理由があつてな」

コホン、と一つ咳払いしてから話し始める。

「俺がここに来た時だ。僅かにだが、俺が最もここに早く到着。その直後に六つの『気』を感じ取った。それが、君達三人と他四人の『気』。つまり、然程の時間差が無いことから同じ境遇の人と見て、ここに集めて話をしようって訳」

成程、と三人は相槌を打つ。

その後、暫く待つこととなり、林の中でのんびりと過ごした。

深い深い地下。この星の核とも言える場所。そこに、黒い巨大な何か鎮座していた。黒い何かは、核を侵食しほぼ一体化している。

それはつまり、この星の支配度を表していた。  
ザワザワと、不気味に揺れる。

その近くの開けた場所に幾多もの黒い影が集まりだす。

「第六十三区、制圧完了しました」

「第九十八区、制圧完了しました」

「第二百二十四区、制圧完了しました」

「第百

」  
その影から機械的に音が発せられる。音が聞こえなくなった物は消え、そこにまた新たな影が現れ　と、それを何度も何度も繰り返す。

「……………」  
中央に鎮座するモノは、ただ無言で聞き入っていた。

「緊急事態により、報告いたします」

そんな時、他のとは何ら変わりの無い黒い影が別のことについて口を開いた。

「第三百二区、謎の者達により制圧に失敗しました。敵数は五人。

それに加え、残り三人の生存者を確認しました。いずれも危険分子と満なされています」

「そこで、音は途絶えた。黒く、巨大な何かから伸びた巨大な黒い手によって潰されていたからだ。」

「……………潰せ」

巨大な黒い何かから漸く音が発された。それに「了解しました」と黒い影達が一斉に呼応した後、消えた。

これからが、悲劇の幕開けだ

！！

！！！！！！！！！！



## 強者と兵とツワモノ（前書き）

お待たせしてしまい、申し訳ございませんでした。

## 強者と兵とツワモノ

荒れ果てた道路だった場所を四人は歩く。

「……後ちよつとだな」

三人の前を歩く四季流星は先を見ながら言った。行く先には、四つの『気』が集まっている。そこに向けて流星を含めた四人 東雲神無、大神宗介、メアリー・フィティナス は進んでいた。

「だいたい1kmぐらいか？」

メアリーを背負った宗介も口を開いた。何故彼女を背負っているかというと、単に歩き疲れたからである。置いていく訳にもいかなかった宗介は仕方なくおんぶをしていたのだった。

「そうなるな。早めに行こう」

そう言つて流星は歩を速める。

しかし、数歩進んだ所でピタリと止まった。その表情は、堅く歪んでいた。

「……おいおい、一体何体出てくるつもりだよ……流石に呆れるぜ」  
木刀を肩に担ぎ直し、足に『気』を溜めた。

再び彼らの前に姿を現したのはあの黒いモノ。しかし、

「……何か、違う……」

様子が違った。それは、今まで出てきた人型ではなく、六本の脚を持つ爬虫類のような体型のモノとでも表現出来る。それが、何十体と現れたのだ。

「ひう……」

「ぐえ」

そのおぞましい姿にメアリーの腕に自然と力が入る。そうになると、宗介の首が締まる構造となっており……、

「……いい加減にしろよ」

案の定宗介がキレた。そのドスの利いた声によりメアリーは涙目になりながら手の力を緩めた。

大きく息を吐いた後、宗介はメアリーを地面に降ろし、流星や神無に続いて構えた。

「俺が特功仕掛けるから、神無は遊撃に。宗介はフィティナスを守りながら付いて来てくれ。この包囲網を一気に突破するッ」

流星が指示を飛ばす。その間に木刀が蒼く輝き始めた。

「突破戦開始だ！ 蒼刃雷撃刃！」

気刃が黒いモノを斬りつけると同時、四人は一斉に動き始めた。

「ありやりや、こりやまた予想外の出来事が」

場面は変わり林の中。『気』の感知を行っていた天音椎狩は呟いた。

「予想外つてのは？」

その隣に座る神楽春樹が椎狩に尋ねた。それに椎狩は半ば呆れたような表情で返す。

「まあた敵が出て来やがった。いい加減待つのも飽きた」

「迎え行くか、と呟き立ち上がる。」

「丁度良い。体も鈍ってたところだ。敵が何かは知らんが、戦わせてくれんだろ？」

渡辺豪も、笑いながら言った。その笑みは、ケモノのソレだ。

「王貴はどうする？」

春樹も立ち上がり、王貴を見る。当の本人である王貴は笑った。それはそれは、とても楽しそうに。

「無論。行くぞ」

音もなく、四人の体が浮く。

「んじゃ、出発」

ネイチャーシエイブ

『自然体』と化した椎狩は三人を連れ、不気味な空に飛び立った。

黒い怪物は思った以上に巨大で、一体倒すのに相当の時間を要していた。

「蒼刃雷撃刃！」

蒼の気刃が辺りを一層する。しかし、黒いモノはすぐに復活を遂げ、間髪入れずに攻撃を仕掛けてくる。

流星も、『気』にはまだ余裕はあるが、精神的に参ってきてはい

た。  
精神的な乱れは、集中力の低下に繋がる。即ち、隙を突かれれば  
いつ戦線が崩壊するかもわからない状態なのだ。

「キリが…無えぞ……！」

44マグナムを一体に浴びせ、神無が悪態を吐く。復活はしな  
かったが、その更に後ろの奴が突っ込んできた。

44マグナムの拳動で、次の動作が間に合わない。

ドンッ！

が、その横合いから『気』の塊がぶつかり、爆風と共に黒いモノ  
を吹き飛ばした。

「サンキュー宗介！」

「礼するよりまずは目の前をどうかしる！」

『気』は、宗介が放った物。

肩ごしに彼を見ると、予想以上大変なのが見えた。

宗介が相手取る数は流星や神無と変わらない。それでも、彼はメアリーを庇いながら闘っているのだ。

そんな自分よりも過酷な状況にいる人に助けられる等、言語道断。プライドが許さない。

「行くぜ！」

再度拳を握り締め、戦場を駆けた。

あの時神無の援護をしたのはキツかったと宗介は感じる。護りながらの戦闘というのは無経験に近い。ハッキリ言って、もう負けが目に見えていた。

その声を聞くまでは……。

「コッタイター神喰らい」

突如、天と地が牙を剥いた。

降り掛かる『炎』『雷』『水』『風』と、地より突き出す『氷』『土』『樹』の槍。

天地から挟むそれは、まさしく神を喰らう牙。

広範囲の黒いモノ達が、喰われ、消えた。

しかし、それでもまだ生き残りがいる。

だが、

「エレ・シュキガル螺旋乖離す大嵐の風！」

「ニースホック魂運ぶ毒蛇の王！」

フレスベルク骸引き裂く大鷲！」

「見様見真似・轟風！」

赤き閃光が、気の嵐が、荒れ狂う暴風が、全てを薙ぎ払った。

「……何だあ……？」

いきなりの超攻撃に、流星は木刀を肩に担いで空を見上げた。

上空には四つの人影。その四人が、ゆっくりと降下してきた。

「キロロ英雄気分だな」

「何言うか駄獣。本物の英雄は王オレだろ？」

「何イツ!？」

「「いがみ合うな」」

一瞬だけ、宗介等三人は本物の英雄かと思っただが、それでもなかつた。

「……誰だ……アンタ等……」

男子衆二人の声が、ぴつたりと重なった。

「で、メアリー以外が全員ここに同じように飛ばされたって口か…」  
宗介が背中にメアリーを背負うように全員の顔を見渡した。

(…何、あれ、ロリータコンプレックス?)

(バカか豪。そういうのは見て見ぬフリをするんだ)

(豪、春樹。お前等対外にしろよ。これでも俺が最も年長だからな)  
ここそと場に合わない耳打ちをする豪と春樹に、言葉通り年長の椎狩がツツコミを入れた。

「………兎も角、現状の把握が先だろうな」

あまりに皆が口をつぐむので、と神無が言った。

「ここにいる一人以外が全員平行世界パラレルワールドから来たとなれば、今見てわかる通りのサマを説明可能なのは、メアリー一人だけだ」

全員の視線が周りを彷徨った後、メアリーに集められた。

周りは、荒れた大地。

削られた地面。崩れた民家。枯れはてた植物達。

酷い有様だった(八割方彼ら七人が暴れた所為でもあるのだが)。

皆の視線が自分に集中し、ビクウツ！ と肩を震わせた後、メアリーは更に縮こまって宗介の後ろに隠れた。

(……ほう。ではあれはやはりロリー)

(……その話題はもういい！)

そして何故が王貴が続きかけた話に、宗介以外の五人が盛大且静粛にツツコミを入れたのだった。



7人の英雄 - 7th HEROES -

八人の人影が、グングン空へ空へと上昇する。

その中心にいる人物 天音椎狩の表情は険しかった。

決して疲れた訳ではない。それでも、この状況は些かマズかった。

その八人を追うのは巨大な影 アクババと呼ばれるものだ。

彼がこの世界に来た時一番最初に遭遇した、かなり厄介な奴だ。

異様なカタチをしたソレは、何十匹という塊になり、椎狩達を追いかけて回っていた。

「蒼刃嵐撃刃！」

蒼の無数の気刃が空を駆ける。しかし、それは大半が狙いから外れたり、擦る程度だ。

「クソッ！」

四季流星は、自分の未熟さに嘆いた。

空中という不安定な体勢での攻撃は体重移動が難しく、いつも地上戦の流星には少々キツかった。

他にも、剣やら気やら風の塊やかなりの物が飛来するが、それをアクババは擦るように躲す。

今までに二体程は撃墜したが、それっきり。

椎狩も振り切ろうと躍起になり、今までにない速度の飛行をしていた。

上昇していた椎狩が向きを変え、次は真下に降下する。

「椎狩！ 次は右！」

「オーケー！」

全速力で飛行に専念する椎狩に東雲神無が声をかける。その声に椎狩が返事を返し、無重力空間を右に伸ばして移動した。

椎狩の眼・判断の役を受け持つのが神無。

椎狩が飛ぶ・方向転換の為に精神を集中しているので、超近接戦闘を専門とする神無は、失礼だがやることがないので、椎狩の補佐をしているのだ。

「…クソツ…！ 撒けねえ…！」

椎狩が苦い顔で毒づく。

彼此もう一時間近くはトップスピードで飛行している。

椎狩の『自然体』ネイチャーシエインは、それぞれ3つの『気』を均等に扱うことで、そのカタチを維持している。そして、その『気』を常に動かすことにより活性化させ、身体強化に繋がるのだ。

『気』を常に動かす、ということは、常に『気』を消費するということ。

椎狩には『気』が異常にあるとはいえ、限界もある。

彼もこれ以上の『気』の消費は避けたかった。

「椎狩！ 前だ前！」

「ンなツ！？」

いきなり、前方にアクババの群れが現れる。しかもそれらが突っ込んでくると来た。

「ぐウツ！！」

咄嗟に椎狩が停止。

それ以外の七人が、急にバラバラの方向に飛ばされた。

まさか、前にアクババが回り込むとは想像していなかった。  
椎狩は難とか皆を逃がした。  
刹那、アクババの群れが全て、椎狩に突っ込んだ。

飛ばされた七人、全員が目を見開いた。

椎狩がいた場所に、アクババ達が殺到していったのを、七人は空中に浮いたまま見つめた。

「椎狩！ …ヤバイッ！」

100m先のアクババの塊に向かって流星が叫んだ。無論、返事等、返ってくることはない。

「スマン、耐えてくれ！ 星…！」

唇を噛み締めながらも、流星は木刀に『気』を流し込み、『星斬り』を放とうとした。

しかし、流星はそれ以上動くことはなかった。

いきなり、アクババの塊を中心に全てが燃えたのだ。

「はッ！？」

炎は流星の目の前にまで迫り、止まる。

数十秒間に渡って燃えた後、炎は自然に消えた。

「危ねっ……………」

その中央にいた人物

天音椎狩が呟いた。

深紅の炎に燃える髪・瞳・スカーフ。

その姿はまさしく火精霊だ。サラマンドラ

「ありやあまた……………。変わった姿だったな……………」

「『ネイチャー・シエイク・カイ自然体・改』。

単属性に特化した状態だ。そして、さっきのは

『炎』という訳

「新技か？」

「ああ。飛んでる最中に思い付いた」

「真剣かよ……………」

椎狩の説明に一同が半ば呆れ顔に。残り半分は安堵の表情だ。

彼らは今、先程の襲来を警戒し、歩いていた。

一時間程歩き、開けた場所に来た一行は動かずにただ回りをジッと睨んでいる。

本能的にここが目的地であると告げているのだ。

「…嫌な感じだ……」  
春樹の呟きに一同が頷く。

歩いていた時。この場所に近づくにつれて、重圧が増すような。八人はそう感じていた。

「………来たか。イレギュラー」

その声おとを聞いて、全員がそちら 広場の中央を見た。

「……… 貴様等のおかげで計画が進まん。消えてもらっぞ」

そこにいた 否、あったモノは、『黒』。

「……『邪王』……」

メアリーが、そう呟く。

『イビルキング  
邪王』

この惑星を滅ぼそうとしている元凶。  
直ちに排除しなければならぬ存在。

「……… 私が手を出さなくとも事足りる。」「行ケ、役立たズノ下  
僕共！」「」

『黒』の命令に、突如現れた黒いモノ達が波の如く押し寄せる。

が、

「握った刀は己の為に。掴んだ輝きは誰かの為に。行くぞ、蒼月！

星斬り！」

「我が螺旋剣の舞、篤と見よ！ 螺旋エレ・シユキガル乖離す大嵐の風！」

蒼い気刃と紅い閃光がそれを吹き飛ばす。

「ハッ！ 下僕も使わなきや攻撃出来ねえのか」

「王など、王一人オレで充分だ」

蒼月と螺旋剣を構えた流星、王貴。

「骸引き裂く大鷲！」  
フレスヘルク

「ラアツツ！」

十本の気が『黒』を貫き、金色の『気』が『黒』に衝突し、爆発。  
「兎も角、消しゃあ良いんだろ！」

「面白エツ！ さつさとヤルぞ！」

二人の後ろから、豪と宗介が攻撃を仕掛けた。

『……………イレギュラー。その程度か』

しかし、煙を巻く中からは、何事も無かったかのように『黒』が鎮座していた。

一行はそれでも落ち着いたまま。まだ負けではない。

『……………やはり、手を下すのは必要ないようだ』

「だったら、お前と直接やり合うまでだ」

『イビルキング』  
『邪王』は呆れたような声を出したが、神無はそれを無視して一歩前に出る。

『……………残念だがイレギュラー。ここで果てる。「集工、我が全テノ役立タズノ下僕共。ソノ身ヲ私ニ捧ゲ、果テヨ！」』

突如、地面に黒い線で超巨大な魔方陣が描かれた。その線が不気味に揺れる。

模様は、五芒星の頂点を結んだ円。

その中心に黒いモノが集まり出す。

留まることを知らないのか、ソレは既に100mに達しようとしていた。

「デカっ……………」

「……………魔術…なんて有り得るか…………？」

口々に感想を出し、それを見上げる八人。

そこに、『邪王』が言った。  
イビルキング

『……………その「鍵」も貰う』



『……………貴様等の最期を見届けよう』

最終決戦は、遂に幕を開ける

!!!!!!

7人の英雄 - 7th HEROS - (後書き)

少し無理矢理感がありますが、そろそろ最終局面に突入します。



狭い木々の間を擦り抜けて走りながら、小脇に抱えるぐったりとしたメアリーを見て宗介は舌打ちをする。  
何故無関係とも言える娘がこんな仕打ちを受けなければならないのか。

そもそも、連れてきたのが間違いなのだ。

もしかしたら。きっと、無関係な娘でもなかったのかもしれない。  
『イヒルキング 邪王』は『鍵』と言った。

今更、宗介は無理矢理置いて来るべきだったと後悔した。

しかし、その思考も直ぐ様停止する。

ズオアツ!! と。

漆黒の波が辺りを一掃した。

「ッ!?!」

咄嗟に宗介は跳躍。

数メートル跳んで、着地する。

そしてその時。既にそこは、何一つ無い地帯と化していた。







「どこ行つた、あの『奴』ッ!!」

『イビルキング 邪王』がいない。そのことに漸く気付いたのは、椎狩と春樹だった。二人は先の三人に大龍を任せ、豪も引き連れて林の中を駆け回った。

探知をすると、かなり遠くで殺り合っているようだ。

「豪! 人間大砲だッ!」

「何イツ!?!」

「ふざけてはない! お前を最速で宗介の下に飛ばすだけだ!」

「ッ、オーケー!!!」

ズドンッ、と椎狩が轟音と共に『ネイチャーシエイブ 自然体』と化し、『雷』の『改』へ移行。手の中に人間を易々包み込む程の砂鉄や鉱石、全てを磁力で掻き集める。

「ちよいと痺れるが、我慢してくれよ!! 俺も後で行く!」

「望むところだッ!!!」

鉄達が蠢き、豪を覆い尽くす。

刹那、青白く迸る雷が、その塊に纏わりついた。

「逆転の一撃、徳と喰らえッ!!!」

轟ッッッ!!!!!!!!!!!!!!!

ハイパーレールガン  
最高最速の超超超電磁砲が、大空を切り裂く

。



脚に力を込め、再び跳び上がる。  
同じ手は二度と喰らわない。

振り下ろされる腕を冷静に捌き、ガラ空きの懐に黄金脚をねじ込む。

縦に回転しながら真上に吹き飛ばす『邪王』。

が、しかし。今度は『邪王』がすぐさま体勢を立て直し、突っ込んで来た。

「ッッ  
!!!?!」

黄金脚で脚を思いつ切り振り抜いた宗介が硬直。驚く暇も無く、地面に叩き落とされた。

「???!」

肺の中から空気が絞り出され、音も無く声を上げる。

関節が軋み、体中が悲鳴を上げ、意識とは裏腹に宗介を動かそうとはしてくれなかった。

「……中々に強いな、イレギュラーよ」

対して、『邪王』は余裕な態度を崩さない。

「……だが、もう終わりだ」

巨大な腕を動かし、その中心に“黒い塊”を作り出す。

「……死ね」

“黒い塊”が、射出される。

その僅かな隙に、

『トラスロール  
世界樹食す牡鹿ウウウウウウウウツツツツ……!!!』

ハイパーレールガン  
超超超電磁砲となった豪が、『邪王』に大衝突した。

## 突入、最終決戦！！

「次！ 春樹、お前も飛ばす！」

真剣<sup>マジ</sup>かツツ！！？ と春樹は驚愕の声を上げる。

それもそうだ。アレだけの速度で電気を纏いながら飛ぶ等想像しなくもない。

「頼む。他の奴を飛ばすのは『気』の消費が押さえられるんだ。俺がああの速度で飛ぶとなると、『自気』が保たない……だから、頼む」  
既に椎狩の周りには砂鉄やら鉱石やら集まり、塊を作り出していた。

「……自分の周りに『気』を薄く纏えば問題は無い筈。豪は頑丈だから大丈夫だ。メンバーの中で一番打たれ強いしな」

頼めるか？ と椎狩がまっすぐ春樹を見る。

彼もコクリと頷く。

「じゃ、やるか」

『イビルキング もろとせ 邪王』 諸共豪は地面に衝突。

大地が揺れ、轟音を立てて巨大なクレーターが生じる。

『……………グッ……………貴様……………！！』

「……………カツ、油断大敵、だぜ？」

豪が力でもって『イビルキング 邪王』を潰す。



メディアリー  
鍵だ。

その光を、いつの間にか百メートルに到達しそうな『邪王』が捕まえようと腕を藻掻く。その巨大な腕から光は逃げるように宙を舞った。

だが、その光は弱々しく、振るわれる腕をギリギリで擦り抜けているように思われた。それに加え、少しずつだが光が小さくなっていくようにも見える。

「媒体が無いからか……?!?!」

今まで媒体に納まっていた魂は丸ごと放り出され徐々に成仏されていっていきようだ。光も元の媒体であるメディアリーの身体に行くことが出来なくてもどかしそうにうずめくように見えた。

「ッ、ヤバい！」

足に力を込め、飛び上がる。

目指すは光。彼女の媒体への道を作るのだ。

しかし、

ブオオンッ！！！！ とデタラメに振るわれる巨大な腕に当たり、宗介はまた地面にめり込んだ。

「!!!!!!!!!!!!!!?」

口から漏れるの空気のみ。声など決して出なかった。

視界に写る景色。

豪が『邪王』の足元に突っ込み、易々と蹴り出され、春樹が跳躍して光を守ろうとするが振るわれた倍以上の質量を持つ腕に阻まれ、止まるどころか逆に地面と平行に飛ばされて行く。

光が、弱くなる。

最後とばかりに巨大化した『邪王』が腕を振り上げた。



そして、光が納まった頃。そこに、『天使』となったメアリーがいた。

「……ハハツ、なんつう幻想見てんだろうな…俺ら……」  
乾いた笑みを浮かべる豪。春樹も口をあんどり開けていた。

『オオオオオオオツツ！！』

バオオオオオオオオオオオツツ！！！！

椎狩が『邪気』を完全に解放。全身が漆黒に包まれ、最後に背中から翼が吹き出した。

『<sup>イヒルキング</sup>邪王』がそれを殴ろうと腕を振るう。

椎狩は自らソレに突貫。真つ正面から受け止めた。

『ギ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！！！』

背中から更に漆黒の波が噴き出し、翼が倍に膨れ上がる。翼をはためかせ、徐々にだが自分の何倍もある拳を押し返した。

「…皆さん、大丈夫ですかッ？」

メアリーの容姿は殆ど変わらないが、かなりの神秘化によって皆の目を奪った。

「……写メ撮れねえのが中々にショッキングな光景だぜこりゃあ…」

皆の顔には引きつった笑み。未だに信じ難いと思ったに違いない。  
「皆さんを治療します。少し時間はかかりますが、全開にまで回復させます」

嘩然とする中、少々大人びたメアリーが詠唱するように何かを紡いだ。

何を言っているのかはわからない。五十音をバラバラに並べたよ  
うな。そんな言葉を全て聞き終わった刹那、身体中の傷が癒えて跡  
も無くなり、それにプラスして身体を抑えていた重みも消えた。

「おお！ 軽っ！」

手を開いたり、跳ねてみたりと豪は全開となった体を動かす。

他もそれぞれ今までにない爽快感を味わい、体の調子を確かめた。

「： 椎狩さんが危険です、皆さん行きましょう！」

未だ空では椎狩が奮闘していた。しかし、いくらなんでも格が違  
いすぎる。確かにあの正体不明の力を使う椎狩はそれなりに『邪王』  
を押してはいる。が、その良いリズムは長くは続かない。あの力に  
も限界があるのであろう。椎狩が一人で闘い続けて三分が過ぎ、四  
分にもなりそうだ。先程から、段々と動きが鈍くなってきたのが  
が全員の目に見て取れた。

「浮きますから気を付けてくださいっ」

パンツ、とメアリーが手を叩くとそこから金色の粒子が飛び出し、  
その量があつという間に増えて皆を包み込む。すると、体が軽い浮  
遊感を感じた。

「行きます！」

メアリーが先導し、彼らは再び『イビルキング邪王』へと向かった。

再び、戦士が揃う。

終末の刻は、近い。

**突入、最終決戦！！（後書き）**

遅れたのは・・・、まあお許しを。

すみませんでした。

次回はまだ何も書いてないので更に時間がかかるかと。

プロットはそれなりにあるので。

ではまた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024o/>

---

真剣で私に恋しなさい！SSコラボレーション企画『真剣で異世界を救いなさい』

2011年5月29日01時38分発行